研究

湯野・戸田領主　堅田氏とその家臣団

会員　佐伯　隆

はじめに

毛利氏の重臣で、萩藩においては寄組の筆頭格であった堅田氏が、その所領として都濃郡湯野・戸田・莇地、及び先大津日置等を治めていたことは周知のことであろう。堅田氏の知行高は六一二六石余であったが、この内の地方知行高の八割強は、湯野村・戸田村（現在の徳山市湯野・戸田）が占めていた。堅田氏の屋敷は湯野村にあったが、注進案より湯野村・戸田村に家臣が多く配置されていたことが分かり、さながら「堅田藩」の様相を呈していたと言える。実際に、「藩」という表現は、奇兵隊日記（註①）にも「戸田藩臣福永得三云々」とあり、湯野村・戸田村が萩藩の直轄地でありながら、堅田氏が治める小藩のごとき存在であったことが予想できる。以下、小稿では湯野・戸田を中心とした堅田氏の統治体制を「堅田藩」と呼ぶことにする。

ところで、萩藩重臣としての堅田氏については、毛利家文庫の諸史料によって明らかになろうが、領主としての堅田氏や家臣団となると、まとまった史料がみあたらない。堅田藩の調査を湯野・戸田地域の郷土史研究の一環として捉えたとき、その領主（堅田氏）よりも、むしろ領主の家来の調査が重要である。領主は萩に長く滞在し、本藩の職務を行う。これに対し、家来は基本的には領内に根付き、領内の職務を行うと共

に、ある者は寺子屋を開き、医業を行い、また石碑の建立などに参画した。このことは村人の生活・教育・文化に深く影響する。そして堅田藩文書なるものが無い現状では、元家来のご子孫の家々に伝わる史料や、石碑・墓地・位牌などによる調査に頼るしかない。

本稿はこれらの調査から堅田藩の概要を明らかにし、今後の堅田藩研究の一助になればと願うものである。

一、初代堅田元慶とその家臣

堅田家の始祖元慶は毛利元就の臣粟屋元通の次男で、元就に召され、特に小早川隆景に重遇された。元慶は隆景の猶子となり、家紋と名字を許されたが、名字については固辞して受けず、改めて毛利輝元より堅田姓を賜った（註②）。こうして堅田家が建つのであるが、このころから「堅田氏の家臣団」というものが存在したのかどうかは知り得ない。しかし、「堅田元慶家臣」という記載は、断片的ではあるがいくつかの史料で見られる。萩藩士三戸家の系譜（註③）には、

「堅田兵部少輔家頼　宗方新吉　尾川理右衛門」

との記載が見られる。元慶が豊臣秀吉の朝鮮出兵で功があったことは知られているが、文禄元（一五九二）年の出兵の際に、博多において宗方、尾川の両名が口論となり（かなり派手に口論したのだろう）、この一件が秀吉の耳まで達したので、輝元が両名を処罰したという。剱持家の系図（註④）にも同時代の記載として「宗方新吉」の名が見える。また同じく剱持家の系図に、

「堅田兵部少輔元慶家臣田中佐渡守　井上二郎三郎」

との記載が見える。

二、与力一所衆

堅田氏が「家臣団」を持つ過程を理解するうえで、戦国大名としての毛利氏の支配形態、とりわけ与力一所衆について知っておく必要がある。与力一所衆は、山本・小和田氏（註⑤）によれば「毛利氏にとって、領国内の武士化した郷村小土豪の多くは家臣被官・僕

従となり陪臣であったが、かれらの中で毛利氏に一応直属したものは与力一所衆か一戸衆の形態をとった。与力一所衆というのは、小身であるため数名以上がまとめて毛利氏の家臣（おもに有力譜代）に預けられ、その家臣を寄親として軍陣にのぞんだが、平生もその支配を受けた。かれらの知行高は決まっており寄親がこれに介入できず、毛利氏はかれらの配置転換ができる原則であったが、実際は寄親との間に因縁ができそれは容易ではなかった。」と説明されている。閥閲録（註⑥）には堅田元慶を寄親とした一所衆の記載が、以下のようにある。

「　貳百石　粟屋縫殿允
　百石　長原藤兵衛
三百石　和智九郎左衛門
　百石　粟屋勝三郎
　百石　河内五郎兵衛
　三十石　太田武藏
六十六石　福嶋小左衛門
六十六石　福永太郎兵衛
六十六石　久芳与三兵衛
三十三石　羽仁新兵衛
三十三石　長末善兵衛
　五十石　中村藤左衛門
十五石　福永平兵衛
　貳十石　原總介
　拾石　粟屋与三左衛門
十五石　村田与兵衛
　拾石　中村与三右衛門
　拾石　粟屋久左衛門
　八石　町田總右衛門
　八石　井上佐渡
　八石　江草三吉
　八石　坪井杢允
六十六石　末國与左衛門
三十三石　中村新兵衛
　拾石　曉尊

百石　三戸六右衛門
六十六石　高尾又右衛門
百石　御園生平右衛門
三十三石　神保善左衛門
五百石　草苅太郎左衛門
貳千石　堅　大和守
以上
都合四千百六十六石　内貳石過
如此御割符こゐ御役等堅可被相勤事肝要候、以上
慶長五　十二月十二日　榎中入　道派　判
益玄　元祥　判
福越　廣俊　判
堅　大和守殿　」

堅田大和守（元慶）に四一六六石の与力給を与え、三〇名の諸士を与力一所衆として預けたものであるが、ここで注意したいのは、三〇名の諸士はこの時点では堅田氏の家来でなく、あくまでも毛利輝元の家来である。そして、この関係は「御附」と呼ばれた（註⑦）。元慶は元和八（一六二二）年に江戸で亡くなり、与力給は召し上げとなった。この際の経緯を示す興味深い記載が、中村藤左衛門家系図（註⑧）に見られる。

「元吉代ニ堅田元慶ェ與力其後元祐代ニ堅田家与力給共ニ被召上其節ノ一所三十六人被召戻ニ付弟弥九郎罷戻り秀就公御側元ヲ勤元祐者堅田就政幼稚ニテ後見致シ取立候由緒ニテ無拠堅田家ニ留リ居候」

即ち、中村元吉の代から堅田元慶の与力一所衆であったが、元祐（元吉の子）代に堅田氏が与力給を召し上げられ、その時与力一所衆であった三六人の諸士は、再び毛利氏の直属となった。しかし、元祐は堅田就政（元慶嫡男）が幼かったため、後見役として堅田家に留まり、代わりに弟の弥九郎が、毛利秀就の家臣になったというものである。以後、中村家は代々堅田氏の家臣となり、永代家老格に列せられている。与力一所衆であった河内五郎兵衛・福永太郎兵衛・長末善兵衛・福永平兵衛・三戸六右衛門もまた堅田家に入っている。

以上見てきたように、重臣のほとんどが与力一所衆

によって堅田氏と関わりを持っている。また、小早川氏の家臣の一部や元慶時代からの家来も含めて、堅田氏の家臣団はその骨格が形成されていったものと考えられる（註⑨）。

三、湯野・戸田領主とその家臣団の成立

与力一所衆は、毛利輝元からそれぞれに知行を与えられていた。福永太郎兵衛家系図（註⑩）によると、福永家は備後増原や備中井原村を給していたが、毛利氏が関ヶ原の戦で敗れたので、割付として堅田元慶の領地である大津郡三隅に住居を構えた。その後、同じく元慶の領地であった熊毛郡尾郷に住み、寛永二（一六二五）年に堅田家二代となる就政が湯野村・戸田村を拝領したので、湯野村に住んだとある。以後、明治維新まで二四三年の間、堅田藩は湯野村・戸田村を本拠に、その治世を展開していくことになる。

四、堅田藩の分限帳について

天保年間に調査された注進案には、一八〇名（内、湯野・戸田村は一七五名）の家臣が記されており、足軽・中間の名前まであるので、諸所でこれが堅田家の分限帳のような扱いで引用されてきた。しかし、注進案は天保の改革に際して、本藩が村々の状況を注進させたという性質上、分限帳のような厳密、且つ格式の整った形で記載されたものであるかというと疑問がある。また、家臣の約五％に当たる萩城下に住んでいる者の存在を知ることができない（註⑪）。

これまで分限帳の存在を調査し、これに該当するものを五点確認している。このうち『御家来中總高石貫根帳』（写真1、註⑫）は、文久元（一八六一）年一一月の全家来を記した史料で、これによって当時の家臣団の全容が判る。『安政五年御家来中分限録』（註⑬）は、禄高の増減や配分方法についての記述がより詳しいが、前半部のみ現存しており、残り約三分の二は失われている。時代が前後するが、『文政十一年改

家老中大組中分限高控』（註⑭）は、注進案より数年さかのぼった一八二八年の史料である。実際には分限帳を写本し、個人用に使用されたものであり、内容は家老と大組士に限られている。この他、明治三（一八七〇）年の『堅田少輔家来給禄帳』（註⑮）がある。これは新政府の改正米制度に伴って、家臣の改正米・姓名・住所を改正米の高順に記したものである。明治七（一八七四）年の『士族給禄覧聴』（註⑯）も改正米高を書き留めた史料である。

五、堅田藩の家臣団

図1は、安政五年と文久元年の分限帳をもとに、堅田藩の家臣団の構成をまとめたものである。（文久元年の分限帳は巻末に掲載）

写真1　御家中總高石貫根帳

図1　堅田藩の家臣団の構成

永代家老は、河内氏を筆頭として六家である。家老の中から「當役」が選ばれた。次の階級は「大組士」と呼ばれ、この中で優秀なものは一代家老に昇格した。大組士には二つの組があり、一方を湯野組、他方を戸田組と呼んだ。しかし、「湯野に住んでいるものが湯野組」という訳でもなく、詳細な意味は不明である。次に大組士下等として、大工や金工業をもって使える業家があった。さらに徒士、徒士業家と続き、最後に足軽、中間となる。以上、家臣は家老から中間まで含めて総勢二〇〇名であり、このうちの四七％は大組士が占めている。ちなみに、明治三年の『堅田少輔家来給禄帳』では一八九名であるが、同時期で厚狭毛利氏

の家来が二四七名（註⑰）、阿川毛利氏の家来が一八四名（註⑱）である。

六、堅田藩の給禄

堅田藩の家臣の給禄については、いずれ別稿で詳しく述べたいと思うが、ここでは巻末に示した文久元年の分限帳を解説する目的で、その概要を示す。

まず「高唱え」の石高があり、これは手取りではなく、家格を示す。内訳は「根石」と「石貫」から成っており、高唱えの石高の八割が根石、二割が石貫である。家老給の家臣の場合、根石の約一割が米で支給され、石貫は八〇銀で支払われた（註⑲）。

石貫が支払われるようになったのは、文久元年からであり、このことを示す判物として家老福永家、大組士河村家（写真2）、および大組士坂田家宛のものが現存している（註⑳）。

写真2　堅田健助判物（河村弥七郎宛）

興味深いこととして、文久元年の永代家老の禄高は、先に示した与力一所衆時代の禄高と、ほぼ同じであることに気づく。江戸時代において、彼らは毛利氏の陪臣であったが、その家格は堅田氏によって保証されていたということになるのであろうか。

七、堅田藩士の気風

吉田松陰は堅田藩士のことを「吾れ戸田の人士を歴観するに、淳素質朴、猶ほ古色あり。然れども謹勅謙譲、礑落の風に乏し。」と、古風でおとなしく、言い換えれば活気がないと捉えているようである（註㉑）。実際、本藩から遠く離れた戸田・湯野の人士は萩に住む松陰にとっては、古風に見えたのかもしれない。しかし、松下村塾に度々足を運んだ家老の河内紀令・田坂庸・中村多三郎、また大組士の竹下琢磨や坂田晋作などについては、大きな期待を持っていたようである

（註㉒）。現に、彼らが戸田・湯野に帰郷してから、堅田家中の諸士に与えた影響は多大なものがあり、これが堅田藩の四境戦争・戊辰の役での活躍に結びついていったものと考えられる（註㉓）。

しかし、なぜ松陰が古風であると言った堅田藩士の中に、幕末の時代の流れを察知できる人材がいたのであろうか。これは、堅田藩における平素の教育にあると考えられるが、その内容が閉じた藩内でのマンネリ化したものであっては意味がない。おそらく大組医業と呼ばれる医者の留学が、藩内の学問の活性化に与えた影響が大きいのではないだろうか。

八、明治以後の堅田藩士の動向

明治新政府となってからの元堅田藩士の動向を見ると、堅田藩の教育のレベルが高かったことが判る。家老福永家の当主政太郎は、初等教育に従事したが、その子、整の代に京都に移り、京都府立京都第二中学校（現京都大学の前身）で、漢文を教えた。大組士福永四郎兵衛・祥人の親子は、堅田藩校の成章堂で藩士の子弟を教授していたが、後に祥人・登人の親子は山口市において私塾を開いている。夏目漱石の「坊ちゃん」のモデルとして最近注目されている大組士弘中家の又一についても、又一が独学で教師になったとの見方があるが、実は彼の母は先に述べた福永四郎兵衛の娘であり、祖父である四郎兵衛の影響を受けたことは容易に想像できる。また、近くには大組士で医師の竹下泰蔵が住んでいた。泰蔵は長崎に留学して医術を学んだが、書に優れ、湯野・戸田内に多くの碑文を残している。この他、県文化財の「山田家本屋」で有名な大組士山田家の当主稔之丞は、文学面に才覚のあったことで知られている。一方で、明治新政府の制度によって、いわゆる「職」を失い、文化人でありながら、時代の変革に付いてゆけなかった家々もある。

おわりに

湯野下迫の堅田家墓所の傍らに、「昭和十一年堅田

家御廟所復興工事竣成記念祭碑」がある（写真3）。

元大組士の田嶋家の子孫誠一が碑文の撰者であるが、その概要は、「堅田家の廟域には元慶公から九世謹恪公までの立派な天然石の墓があったが、明治初年に堅田家が神道に改宗したため、神霊碑が建てられ、天然石の墓は打ち倒された。その後、墓は風雨にさらされ半埋没する悲惨な状態となった。我らの祖曾に対する旧主の恩沢を思えば、この惨状を傍視できるであろうか、できるはずがない。そこで、旧臣の間で哀情の寄附を募り、御廟所復興工事を行った」というものである。碑には、寄付者として堅田鴻四郎を筆頭とし、堅田少輔長女の楢崎清子、そして元家来の名前が続いている。

写真3　堅田家御廟所復興工事竣成記念祭碑

その後、日本は長い戦争の時代に入り、敗戦後の復興、民主主義の導入、高度経済成長と近代化されていった。江戸・明治時代を語る人の少なくなった平成に至り、湯野・戸田に住んでおられる方の中でも、堅田藩の存在を知る人が少なくなってきた。今後とも諸家の史料の存在を探索し、堅田藩から見た湯野・戸田の歴史を明らかにしていきたい。

最後に、本調査は元家来のご子孫が所蔵しておられる史料を中心にまとめた関係上、プライバシー保護の観点から、史料の出典をあまりに明確にすることは避けた。ご了承願いたい。

註

① 田中彰氏編修『奇兵隊日記』上（マツノ書店、一九九八年）四八八頁

② 『堅田家譜録』（毛利家文庫二三譜録か三九、山口県文書館蔵）

③ 三戸義孝氏編著、発行『三戸系図並伝記』（一九七六年）

④ 元大組士剱持家の子孫が所蔵

⑤ 山本大氏・小和田哲夫氏編『戦国大名家臣団辞典』西国編（新人物往来社、一九八一年）一七七頁

堅田氏の一所衆は、後の寄組草刈氏などを含んでおり、「小身」という表現は必ずしも適切とは言えない。

⑥ 『閥閲録』巻十　堅田安房、二六四（マツノ書店、一九九五年）

⑦ 「御附」との記載は前掲②、および『家老福永字家譜』（筆者所蔵）、また「一所」との記載は『福永家系図』（元家老福永太郎兵衛家の子孫が所蔵）、前掲『剱持家系図』、『三戸家譜録』（毛利家文庫二三譜録み三四山口県文書館蔵）など

⑧ 筆者所蔵

⑨ 家老田坂家が、小早川隆景の家臣であったことは、前掲②および『閥閲録』巻一六八（田坂助右衛門）にある。

堅田氏家臣の使用家紋の調査から、与力一所衆で堅田家に入った者の親戚筋も、家来に組み込まれたと予測される。

⑩ 元家老福永太郎兵衛家の子孫が所蔵

⑪ ⑮の住居場所の記載を元に算出した。

⑫ 堅田家の子孫が所蔵

⑬ 元大組士の子孫が所蔵

⑭ 元大組士の子孫が所蔵

⑮ 県庁文書戦前A士族四二　山口県文書館蔵

⑯ 元大組士の子孫が所蔵

⑰ 『毛利一格家来給禄帳』（県庁文書戦前A士族六九　山口県文書館蔵）

⑱ 『毛利宮彦家来給禄配當附其他』（毛利家文庫二三諸臣一八四　山口県文書館蔵）

⑲ 『家来秩禄附立　堅田少輔』筆者所蔵

⑳ 福永家・河村家については子孫が所蔵

坂田家は、その写しが『営中録事』（戸田山田家文書四〇〇　山口県文書館蔵）にある。

㉑ 山口県教育会編纂『吉田松陰全集』第四巻（大和書房・一九七二年）四一四頁

㉒ 河内紀令については、前掲㉑第八巻一三九頁など、田坂庸・中村多三郎は第四巻四一二頁、竹下琢磨は第四巻四一三頁に名前が出てくる。坂田晋作は全集には、その名前は出てこないが、吉田蘇水氏著『湯野・戸田郷土名士小伝』（元大組士の子孫が所蔵）に松下村塾に出入りしたことが記されている。

㉓ 四境戦争では、堅田健助隊として四小隊が小倉に参戦している。その後、堅田少輔は鋭武隊総官となり、福山城・松山城平定の後、帰郷するが、家来の多くは上京し、上野で彰義隊と戦い、その後英国船で常州（茨城県）平潟に向かい、上陸後北上し、駒ケ峯（福島県）で激戦の後帰国している。

史料紹介　―文久元年の分限帳―

文久元年辛酉

御家来中總高石貫根帳

十一月御改正　　記録方

【家老】

高百拾八石七斗五升　　河内紀令

同九拾七石五斗　田坂源太兵衛
同八拾壹石貳斗五升　福永十方衛
同七拾五石　中村多三郎
同五拾七石五斗　永末嘉右衛門
同五拾石　福永　孚
同貳拾五石　新藤匠作
〆五百五石　【身柄一代】
内　根石四百四石
石貫百一石

【大組士（湯野組）】

高六拾壹石八斗七升五合　三戸並人
同四拾壹石貳斗五升　河内繁之進
同三拾七石五斗　池永勇治
同三拾七石五斗　生瀬清見
同三拾三石七斗五升　山縣源介
同三拾四石貳斗五升　福永四郎兵衛
生瀬清見次ニ登ル
同三拾七石貳斗五升　竹下純佑
同貳拾九石三斗七升五合　永末　操
同貳拾八石七斗五升　渋谷速水
同貳拾八石七斗五升　村井道庵　【医】
同貳拾八石七斗五升　弘中常右衛門
同貳拾八石壹斗貳升五合　西郷安宅
同貳拾八石　安藤武一
同貳拾六石貳斗五升　野沢一雄
○此間新藤匠作出位
同貳拾壹石貳斗五升　井上権右衛門
同貳拾壹石貳斗五升　八木源之允
同貳拾石　横見良雄
同拾九石三斗五升三合八勺四才　原　虎之介

同拾八石七斗五升　【医】中村良庵
同拾八石七斗五升　【医】竹下泰仲
同拾八石七斗五升　西　東
同拾六石八斗七升五合　【医】仁保由伯
同拾六石貳斗五升　戸田国吉
同拾五石　吉田新右衛門
同拾四石六斗貳升五合　下川笑七
同拾四石六斗貳升五合　澄田泰介
同拾三石七斗五升　末益素右衛門
同拾貳石五斗　奥谷三右衛門
同拾貳石五斗　中村　亘
同拾貳石五斗　【医】竹内立甫
同拾貳石五斗　町野宗兵衛
同拾壹石九斗三升四合壹勺貳才　椋木直衛
同拾壹石貳斗五升　河村弥七郎
同拾壹石貳斗五升　篠田治右衛門
同拾石八斗七升五合　福田弥三右衛門
同拾石六斗貳升五合　松田清吉
同拾壹石六斗三升　原田市蔵
内壹石六斗三升　先年減石ニシテ文久二戌
三月被差返候事
右上椋木直衛次ニ進む
同九石三斗七升五合　池田勇五郎
同九石　林　亀太郎
同八石七斗五升　西郷　一
同八石壹斗貳升五合　松浦　詠
同七石五斗　宮崎直右衛門
同七石五斗　足達駒次郎
同七石五斗　【医】藤井省吾
同拾貳石八斗四升八合七勺五才　【医】西村良哉

是ゟ業家
同拾貳石五斗
同拾壹石貳斗五升
同拾壹石貳斗五升
同七石五斗
〆九百三拾石六斗三升六合七勺一才
内　根石七百四拾四石五斗九合三勺七才
石貫百八拾六石一斗二升七合三勺四才
【大組士（戸田組）】
高四拾石六斗貳升五合
同三拾七石五斗
同三拾三石七斗五升
同三拾三石三斗七升五合
同三拾壹石八斗七升五合
山田伊織上ニ登る
同三拾三石
文久二壬戌五月知行
没収被仰付候事
同貳拾五石六斗貳升五合
同貳拾五石
同貳拾五石
同貳拾五石
同貳拾五石
同貳拾壹石八斗七升五合
同貳拾壹石貳斗五升
同貳拾石貳斗五升
同貳拾石
同拾九石六升貳合五勺
同拾八石七斗五升
同拾八石七斗五升
【大工業】中村利右衛門
【大工業】中村逸平
【金工業】中村文七
【身柄一代貝業御雇】原田茂吉
柏村新之允
剱持英男
新庄忠三郎
三戸萬六
山田伊織
井上勝藏
池邊
福永　叶
永末市之允
田嶋近之進
大谷　巖
池永良藏
蔵田庫之介
戸澤九十九
坂田晋作
柏村　勇
河口善之介
三好友益
村橋勇藏

同拾八石三斗七升五合
同拾六石貳斗五升
同拾六石貳斗五升
同拾五石八斗七升五合
同拾五石
同拾三石七斗五升
同拾三石壹斗貳升五合
同拾貳石五斗
同拾貳石五斗
同拾壹石八斗七升五合
同拾壹石八斗七升五合
同拾壹石貳斗五升
同拾石八斗七升五合
同拾石八斗七升五合
同拾石六斗貳升五合
同拾石
同九石六斗貳升五合
同九石五斗六升貳合五勺
同九石三斗七升五合
同九石
同八石壹斗貳升五合
已下業家
同拾五石
同拾貳石五斗
同七石五斗
同拾石五斗八升貳合五勺
〆八百八石二斗七合五勺
内　根石六百四拾六石五斗六升六合
石貫百六拾一石六斗四升一合五勺
【医】
阿部隼太
鴻野秀次郎
中村善右衛門
藤井幹藏
高橋静江
瀧山次郎右衛門
八木豊作
山田小三郎
瀧原此右衛門
時重七郎
田中兵衛
瀧山克己
小川幸之允
溝谷利右衛門
大谷新平
田中満藏
加藤忠衛
久山甚右衛門
静間瀬兵衛
【医】
山田恭藏
西川為之介
豊田権藏
中村虎之進
長井本兵衛
池邊多右衛門
福田善吉

【徒士】

高拾壹石壹斗貳升五合　竹下弥右衛門
同拾石八斗七升五合　秋元宅右衛門
同拾石六斗貳升五合　津田亀藏
同九石六斗貳升五合　済田惣右衛門
同八石七斗五升　済田五郎吉
同八石七斗五升　西郷小兵衛
同八石七斗五升　藤本敏介
同八石七斗五升　村林与右衛門
同八石七斗五升　戸村徳次郎
同八石七斗五升　瀧山小源太
同八石壹斗貳升五合　田原半五郎
同八石壹斗貳升五合　原田権兵衛
同八石　村岡半次郎
同七石五斗　栗栖虎之介
同七石五斗　阿部虎之允
同七石五斗　岡谷勇作
同七石五斗　松浦茂市郎
同七石　吉村源右衛門
同七石　岡田彦三
同六石八斗七升五合　河野作右衛門
同六石八斗七升五合
已下身一代
同六石八斗七升五合　村瀬素右衛門
同八石壹斗貳升五合　山本米吉
同七石五斗　福田源之允
已下業家壹人扶持高二ヶ
同七石五斗　永田勝治
同七石五斗　永野竹次郎
同七石五斗　斉藤吉兵衛
同七石五斗　田中久吾
同七石五斗　椋木久右衛門
同七石五斗　伊藤谷五郎
同五石貳斗六升七合七勺六才　秋山直吉
ヶ二百四拾石七斗六升七合七勺六才
内　根石百九拾二石六斗一升四合二勺一才
石貫四拾八石一斗五升三合五勺五才

【足軽・中間】

高拾石八斗七升五合　村井七右衛門
同九石六斗貳升五合　与一兵衛
同九石六斗貳升五合　又兵衛
同八石七斗五升　政介
同八石七斗五升　田中磐右衛門
同八石七斗五升　介次郎
同八石七斗五升　荒田新九郎
同八石七斗五升　傳兵衛
同八石七斗五升　小右衛門
同八石四斗三升七合五勺　清藏
同八石壹斗貳升五合　谷介
同八石壹斗貳升五合　田中茂右衛門
同八石壹斗貳升五合　善太郎
同八石壹斗貳升五合　渡邊弥吉
同八石壹斗貳升五合　五三郎
同八石壹斗貳升五合　九兵衛
同八石　新藏
同八石　徳次郎
同七石八斗七升五合　兼介
同七石八斗七升五合　ヘタ　源吉
同七石八斗七升五合　権治
同七石五斗　弥市
同七石五斗　丹藏

同七石五斗　松野忠次郎
同七石五斗　藤四郎
同七石五斗　甚介
同七石五斗　庄右衛門
同七石五斗　忠兵衛
同六石八斗七升五合　儀兵衛
同六石八斗七升五合　平介
同六石八斗七升五合　寿藏
同六石八斗七升五合　源平
同六石八斗七升五合　源右衛門
同六石八斗七升五合　折平
同六石八斗七升五合　友吉
同六石八斗七升五合　吉兵衛
同六石八斗七升五合　庄次郎
同六石八斗七升五合　丸田勘右衛門
同六石八斗七升五合　民吉
同六石八斗七升五合　勘平
同六石八斗七升五合　孫兵衛
同六石八斗七升五合　才介
同六石八斗七升五合　池田惣右衛門
同六石八斗七升五合　兵藏
同六石八斗七升五合　岩吉
同六石八斗七升五合　弥兵衛
同六石八斗七升五合　利兵衛
同六石八斗七升五合　利介
同六石八斗七升五合　源吉
同六石八斗七升五合　長介
同六石八斗七升五合　里吉
同六石八斗七升五合　浅介
同六石八斗七升五合　多四郎

同六石八斗七升五合　丈八
同六石八斗七升五合　十吉
同六石八斗七升五合　熊野久平
同六石八斗七升五合　嘉吉
同六石八斗七升五合　源九郎
同六石八斗七升五合　村林甲右衛門
同六石八斗七升五合　渡邊平右衛門
同六石八斗七升五合　西郷甚之允
同八石壹斗貳升五合　茂介
同七石五斗　甚藏
同七石五斗　万吉
同七石五斗　弥一兵衛
同七石五斗　瀧山久右衛門
同七石五斗　万介
同六石八斗七升五合　藤井藤藏
同六石八斗七升五合　庄兵衛
〆五百拾八石八斗一升二合五勺
内　根石四百拾五石五升
石貫百三石七斗六升二合五勺

惣高
合三千三石四斗貳升四合四勺七才
内　貳千四百貳石七斗三升九合五勺八才　根石
六百石六斗八升四合八勺九才　石貫
已上

註　**史料紹介の部**

。「高」の内訳として、「内　根石〇石〇斗〇升・石貫〇石〇斗〇升」との記載があるが省略している。
前掲の通り、高の八割が根石で、二割が石貫である。
。【　】中の記載は、筆者が注記したものである。